

## 泣ける授業

2020. 10. 14

皆さんは、ご自分のお子さんの授業参観以外で、授業を見て泣かれたことはおありでしょうか。

私は、県教育センター時代から現在まで、縁があって、毎年のように福島県中学校教育研究協議会国語科部会、要するに中教研国語の県大会の授業に関わってきている。平成25年度は会津大会であった。私が指導助言を担当したのは、南会津中学校3年生の国語の授業であった。学習指導案検討の段階から南会津に出向き、先生方と協議を重ねていった。

当日の授業者は、私と同系統の部活人間である男性教員だった。学級の生徒たちは、素直で表情豊かな生徒たちだった。教室に入ってすぐにわかった。「この先生と生徒たちはうまくいっている」「学級の雰囲気がとてもよい」授業もうまくいきそうな気配がすでであった。

授業は、決してレベルが高いといえるものではなかった。生徒の発表力もまだまだである。それでも、私は授業を見ていて涙が溢れてきたのである。泣かされてしまったのである。自分が檜沢中学校にいたせいもあり、山間部の中学校でがんばる生徒の姿を見て泣けたのかもしれない。でもちよつと違った。

この授業は、この先生とこの生徒たちでないと創り出せないと思ったのである。何も特別な手立てがあるわけではない。生徒のレベルが高いわけでもない。しかし、先生が一人一人の生徒の力を把握し、それを認め、伸ばそうとしていること、生徒が先生の期待に応えようとしていること、生徒がお互いを認め合っていること、先生と生徒たちに素敵な信頼関係があることなどが感じられたのである。そしたら、泣けてしまったのである。

中教研の研究の視点がどうのこうのといったら、さほど評価が高い授業とは言えないかもしれない。参観者の多くもそう思ったことであろう。だが、この授業には、そんなことを超える、もっと大切なものがあったように思う。事後研究会では、指導助言の中で、「今日の授業は、〇〇先生とあの学級の生徒たちでないと為し得ないものです」と話した。そして、「私は泣いてしまいました」と正直に言った。それが、授業者への最大の賛辞になったことと思う。

当日の学習指導案は、授業者が作成したものではない。南会津地区の別な先生方が検討を重ねてつくったものである。授業者は、その授業プランで授業を進めた。この授業者が自ら作成した学習指導案で授業を行っていたとしたら、もっとレベルの高いすばらしい授業になった可能性は非常に高いと思われる。南会津の山間の小さな中学校で繰り広げられる授業を含めた素敵な中学校生活は、生徒たちの宝物になったものと思う。それを支えていたのは、あの授業者の指導力と人柄と教師としての情熱だったはずである。

筑波大学附属小学校のすばらしい指導、すばらしい児童、すばらしい授業を見ても泣けない。お茶の水女子大学附属中学校の見事な授業を見ても泣けない。有田和正先生の授業を見ても、野口芳宏先生の授業を見ても泣けない。それなのに、南会津中学校の授業では泣けるのである。不思議である。授業は児童生徒と教師とで創り上げていくものであることを教えられた。